

ミンゾク研究の光と影

泉水 英計

共同研究「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」グループは、国際シンポジウムの第II部として12月9日に「ミンゾク研究の光と影—近代日本の異文化体験と学知—」と題した公開研究会をおこなった。6名のメンバが個別研究の発表をし、4名が講評にまわった。さらに、ゲストスピーカーとして全京秀先生がソウルから駆けつけ研究グループのメンバと並んで発表に加わってくださった。当日、会場の神奈川大学横浜キャンパス16号館視聴覚ホールBは満席の聴衆で溢れ、発表者との間に活発な質疑応答がおこなわれた。余裕の無い聴衆席に詰めたまま長時間の議論にお付き合いいただき、忌憚のないご意見を次々とお寄せいただいた方々に、オーガナイザーとして改めてお礼申しあげたい。なお、当時のプログラムは下記のような構成であった。

(研究発表1)「『大東亜共栄圏』の民族学—民族の戦争利用—」 中生勝美(桜美林大学/社会人類学)

(研究発表2)「民族学の学術動員—平野義太郎の戦時プロジェクト—」 清水昭俊(国立民族学博物館/文化人類学)

(研究発表3)「泉靖一のニューギニア調査と軍属人類学—大東亜戦争と学問—」 全京秀(ソウル大学校/文化人類学)

(研究発表4)「民研本転々録—民族研究所蔵書の戦中と戦後—」 菊地暁(京都大学/民俗学)

(研究発表5)「『アイヌ民族総合調査』と戦後のミンゾク学/アイヌ研究」 木名瀬高嗣(東京理科大学/文化人類学)

(研究発表6)「米国人による戦後日本調査とその展開—ミシガン大学日本研究所の1950年から1955年の瀬戸内海地域研究—」 谷口陽子(専修大学/文化人類学)

(研究発表7)「柳田国男にとって中国はどんな意味があったのか」 王京(北京大学/民俗学)

研究発表(1~3)へのコメント坂野徹(日本大学/科学史)、研究発表(4・5)へのコメント重信幸彦(国立歴史民俗博物館/民俗学、都市生活文化研究)、研究発表(6・7)へのコメント金広植(東京学芸大学/歴史民俗学)、全体のコメント三浦啓二(日バルカン関係、ルーマニア民俗学)。

植民地帝国という視点から近代日本の学知を再考することは、この20年ばかりの間に一つの研究領域として確立された観がある。岩波講座『近代日本と植民地』や、これを引き継いだ同『「帝国」日本の学知』の出版はこれを端的に示すものであろう。この動向のなかで、民俗学や民族学あるいは文化人類学の歴史的研究の占める位置は注目に値する。これらエスノグラフィーに基礎を置く学術研究の成立は、エスノグラフィーという行為を可能にした社会や政治の動きと不可分の関係にあり、「近代化」や帝国主義、そして植民地で接触する異文化との接触といった問題と直接に関わるからだ。植民地帝国の拡大のなかで、宗主国のエスノグラファーは多様な生活様式を観察する機会を享受するが、同時に、彼らの調査活動によって増大する情報は、例えば、開発可能な資源の案内、住民統治の安定化への政策提言、あるいは体制維持のイデオロギーに資することで政治的支配に奉仕した。「ミンゾク研究の光と

影」とは、このような二面性を指している。

最初の3つの研究発表が何れも第二次世界大戦期を扱ったのは、フィールドでの調査機会の急増と、拡張的な国策との関係の緊密化によりそのような「光と影」が最も顕著になる時期として注目したからであろう。総力戦体制のもとと学界の大規模な動員がはかられ、例えば、相対的に蓄積が少なかった「南方」地誌などはこの時期に関心が一気に高まった。敗戦によって短期で終わる軍学連携ではあったが、新たな調査地を手にした研究者は、この状況をどのようにとらえ、いかなる展望のもとにどのような行動をとったのか、石田英一郎や平野義太郎そして泉靖一というように具体的な人物に沿って検討された点が目を惹いた。

エスノグラフィーに基礎づけられた学知が展開するうえで、学界内の組織的変遷と結びついた、より複雑な局面も見逃せない。1934年暮れに、民俗ばかりでなく歴史や言語を専門とする東アジア研究者が集まって日本民族学会が結成され、新春より機関誌『民族学研究』の刊行が始まる。この動きに反応するように、すでに木曜会および全国山村生活調査などで組織的活動の実績を積んでいた日本研究者たちは、「日本民俗学講習会」を経て民間伝承の会に結集する。文化人類学会と日本民俗学会の並存として今日まで続く協同、分業あるいは対抗の原点となる出来事であった。ただし、一国民俗学を掲げた研究組織であっても、その活動範囲は国内に限定されたものではなく、隣接地域での研究活動へ影響を与え、また、暗に陽に影響を受けつつ展開する。柳田国男の学問形成に中国研究が与えた影響という従来看過されてきた関連を説得的に示した王の発表はもちろんだが、日本民俗学と、金の論じた朝鮮半島の民俗学会との関係をめぐる諸問題が研究会の議論で一つの焦点となった。

戦中期までには二つのミンゾク学への分化が一旦は確立されたかにみえたが、海外植民地の喪失による調査機会の縮小によって両者は調査フィールドを再度共有することになる。占領期の斯学の様態をこのように捉えたうえで、大戦中の活動がもたらした遺産の戦後処理について、また、植民地から国内のフィールドに戻った研究者の活動について、そして、再度二つのミンゾク学へと分化していく研究者間の緊張関係についての検討も見逃せない。菊地の発表は、斯学の戦後処理の狭間で大学図書館に埋没してしまった一群の書籍の緻密な調査により学史の一端を明らかにした。泉靖一のアイヌ調査ノートからフィールドでの実態をつかみ、出版された記録との齟齬や、解釈の生成についての問題を指摘した木名瀬の発表も、新たな一次資料を活用したものであった。

連合国による占領という社会状況もまた近代日本の異文化体験であろう。海外進出とは立場を入れ替えたこの体験から日本人研究者はどのような影響を受け、いかなる反応を示したのか。オリジナルなデータを駆使してこの問題を扱ったのが谷口の発表だ。彼女の検討を起点に占領期の学史については、聴衆からの反応も加わって盛んな議論を呼ぶことになった。

これら公開研究会で口頭発表された研究は、共同研究全体の成果報告書として、当日は講評にまわったメンバによる研究論文と合わせ、以下のような構成で『国際常民文化研究叢書4—第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学—』として刊行されている。合わせてご参照いただければ幸甚である。

国際常民文化研究叢書 4

—第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学—

目 次

刊行によせて 佐野 賢治

論文編

共同研究の経緯 研究代表者 泉水 英計

第 I 章 戦時の研究者

民族学の戦時学術動員—岡正雄と民族研究所、平野義太郎と太平洋協會— 清水 昭俊

「大東亜共栄圏」の民族学—民族の戦争利用— 中生 勝美

泉靖一のニューギニア調査と軍属人類学 全 京 秀 (李 徳雨 訳)

—大東亜戦争と学問—

考古学者・甲野勇の太平洋戦争—「編年学派」と日本人種論— 坂 野 徹

第 II 章 隣接地域との関係

『南島』—植民地台湾における未完の沖縄学— 泉水 英計

朝鮮民俗学会の成立とその活動 金 広 植

柳田国男と中国—1920年代以前を中心に— 王 京

第 III 章 戦後の展開

米国人による戦後日本調査とその展開 谷口 陽子

—ミシガン大学日本研究所による 1950 年から 1955 年の

瀬戸内海地域研究—

ミルチャ・エリアーデと日本の民俗学・民族学 三浦 啓二

民研本転々録—民族研究所蔵書の戦中と戦後— 菊 地 暁

あとがき 研究代表者 泉水 英計

共同研究の活動記録

発行日 2013 年 3 月 1 日

編集・発行 神奈川大学 国際常民文化研究機構

ISBN978-4-9907018-4-0